

後撰集

上

共二冊

未懸志本

出

第五十七函

太政官文庫			
和	特別	三一八三〇	門
書		第四十二番	號
		函架	二冊

内閣文庫	
番號	和 31830
冊數	2 (1)
函號	樹42 1

特 42-1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







子也... 海... 子也... 海...

人志す

志の... 部... 志の... 部...

志の... 部... 志の... 部...

志

志の... 部... 志の... 部...

志

行明の...

志の... 部... 志の... 部...

志の... 部... 志の... 部...

志

志の... 部... 志の... 部...

志の... 部... 志の... 部...

しむより花ありては花のつらき花のつらき
しむより花ありては花のつらき花のつらき

しむ人しす

梅の花もさかすまもあつちてはさきさきの
かよひもさかすまの家のまゝの物はさか
ちて

さかす

し家のさかすまもあつちてはさきさきの
し家のさかすまもあつちてはさきさきの

し家のさかすまもあつちてはさきさきの
し家のさかすまもあつちてはさきさきの

存るのまじり

し家のさかすまもあつちてはさきさきの
し家のさかすまもあつちてはさきさきの

し家のさかすまもあつちてはさきさきの
し家のさかすまもあつちてはさきさきの

しむ人しす

し家のさかすまもあつちてはさきさきの
し家のさかすまもあつちてはさきさきの

こころのなまじりつゝをばあはれとて
のちのちのちのちのちのちのちのちのち
はるかに
まことに
こころのなまじりつゝをばあはれとて
のちのちのちのちのちのちのちのちのち

巻一

後撰和歌集巻第二

春歌中

こころのなまじりつゝをばあはれとて
のちのちのちのちのちのちのちのちのち
はるかに
まことに
こころのなまじりつゝをばあはれとて
のちのちのちのちのちのちのちのちのち

傍正通歌

花をわらうよふら梅花をよむ時法喜人よむま

花のよむまはしるしよむまはしるしよむまは

花のよむまはしるしよむまはしるしよむまは

心よりいふまじき梅の花の梅の花の梅の花

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

見ぬ人の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

次々梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

しる梅の花の梅の花の梅の花の梅の花の梅の花

よむまはしるしよむまはしるしよむまは

つせよしははれを

せうのふを

桜花のよきあはれをのめりて

まのふ

作勢

まのふのよきあはれをのめりて

まのふ

作勢

あはれをのめりて

まのふ

作勢

あはれをのめりて

まのふ

あはれをのめりて

まのふ

存徳子之妻
三系正長娘

あはれをのめりて

まのふ

作勢

あはれをのめりて

まのふ

あはれをのめりて

まのふ

あはれをのめりて

わりのまゝ

此の世にま

ありていふ儂しあいのたゞいじり入也

うりく

卷二

後撰心算集卷三

春舟下

贈大政大臣あひまし七のりあを七こも

とあ七はりし好

あまのりあは

石長
大御海邊

書りてあましり七我身もあつたもあつた

梅の世もあつたせりあつたあつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
はねをうさぎにけうけくはなとまゝあつた
とまゝのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎ
うさぎ

うさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎ

うさぎ

うたがみまことよあまのち

はかりしむる

言合七あまのちのちたのけの心あのみ

とけのふつとく身ゆりてのちのちの家あ

あのかたゆりかひをうたさうま

あまのちゆかりまゆりてあまのちたのけ

まはりの人まひいしあ

よまむしす

しんがゆゆえあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あまのちあまのちあまのちあまのち

あつた雨の如く作りなれん

有急のこころの如く

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

うそくす

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

曲待ふかのおか

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

源内をさすけのおか

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

伊勢

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

あつた雨の如く作りなれん

冬うららとて梅は紅まふもせとけさる春も
法皇のちとこのころの月も三條を長の翁
とけのおたう家よ海りて物もさる春の
花さけやりの水のなうらと七聖これお不
美由一人さる所そめ

三條を長
三條を長

おしり美若くお春の心もたうこのもさるの梅さ
の翁さけるの翁人
とておらりの翁春もさるの翁さる
はらさる

とておらりの翁春もさるの翁さる
こころえりてとておらりの翁さる
さる翁もさるの翁さる

三條を長

とておらりの翁春もさるの翁さる
お翁さけるの翁人
一葉の翁七しおら春の翁さる
初めをとりてお翁さるの翁さる
部さる
さるの翁さるの翁さる

後撰和歌集卷之四

春哥

部

今更

夕暮りいなる夜よあけぬとまほしき今更かゝるも
あはれなるの春の月影に春は花をさかす時
卯月けりいづれらのしほも物なること
しほ七るすすせしうとほりてんと
けふととすし物もまほし
時をあらはれぬまほし物なるのまほしき
あ

部寸

作書

こゝろそ月約の時を録りて板法にせり
存系の中この命ぬもも物なるかどえ
のてよはしり物なる又のしりかきんを
よはせそらりしりしりしりしり

持
うし書りたのり長

さうり首の書りたのり長
かとの由はしりしりしりしりしり
え物なる
しりしりしりしりしりしり

しりしりしりしりしりしりしりしり

茶のしりしりしりしりしりしりしり

このしりしりしりしりしりしりしり
物なるしりしりしりしりしりしり
あひしりしりしりしりしりしりしり
朱羅院の東文みたりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしり

あひしりしりしりしりしりしり

かゝるしりしりしりしりしりしりしり
友のしりしりしりしりしりしりしり

とんたにこしてゆるる人きりよんゆてはり

せう

うま

二葉の枝をひきまきしはるのこころをいふ

西

平河の歌をうらそくしてあまの海をうらそくして

下りのともあひの比もくした物なる女の

こころをいふ

はるのこころをいふはるのこころをいふ

部

又もあまのこころをいふはるのこころをいふ

三十一

あまのこころをいふはるのこころをいふ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

うら

せ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

うら

あまのこころをいふはるのこころをいふ

あまのこころをいふはるのこころをいふ

すもまふあふまのたつづるなりしに
印す

らふて祿と異えらするは
は祿とらひ友のまふは余と
せむらふまふは友のまふ
まふのまふは友のまふ
人のまふは友のまふ
いふまふのまふは友のまふ
印す

すもまふあふまのたつづるなりしに
印す

すもまふあふまのたつづるなりしに
印す

すもまふあふまのたつづるなりしに
印す

大政大臣

白紙

梅のこころをわらわすよとて雲のわたりに
たひす

そこのこころをわらわすよとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

新す

天の川をわらわすよとて雲のわたりに

月をわらわすよとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

よとて雲のわたりに

なつ月あり海く物なるに
しかりまじり神事ある月を秋と云ふ
水育るる一しは夏ゆりそ月あり
夫と云ふ

月ありて月を月と云ふ
な月ありて月を月と云ふ
な月ありて月を月と云ふ

あす

梅葉わす集ます

秋うつ

あすのふこま家のこ合

あす

なすの葉くあつて秋と云ふ

あす

あすの葉くあつて秋と云ふ
あすの葉くあつて秋と云ふ
あすの葉くあつて秋と云ふ
あすの葉くあつて秋と云ふ
あすの葉くあつて秋と云ふ

いふ世に宿の秋の六秋は世に秋の部
白くす

秋のつらみうしる言はるる公の御心は

あふの心

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

女のつらみうしる言はるる公の御心は

あふ

あふの心

秋のつらみうしる言はるる公の御心は

あふ

あふの心

秋のつらみうしる言はるる公の御心は

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも
あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも
あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

あふ

あふの心

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

あふ

あふの心

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

あふの心とすもあふの心とすもあふの心とすも

あふの心

雨を水海より天川にひらき流すにえとらん

水

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水

水

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

水海より流せし水は天川にひらき流すにえとらん

存意の事なりとの事
カニのいれおのれをたふし
し
ふまへ

七夏の河東のいれおのれをたふし
七夏の河東のいれおのれをたふし

天川に流るる水も
天川に流るる水も

しつらりい天川に流るる水も
しつらりい天川に流るる水も

天川に流るる水も
天川に流るる水も

天川に流るる水も
天川に流るる水も

天川に流るる水も
天川に流るる水も

天川に流るる水も
天川に流るる水も

うね

秋の河東のいれおのれをたふし
秋の河東のいれおのれをたふし

七月八日の事

うね

天川に流るる水も
天川に流るる水も

うね

うね

朝房をたもたせんとす人のあつたはりて
しんす

秋のさきすはるのしんすはる
しんす

松のさきすはるのしんすはる

業平の巻

ゆきすはるのしんすはるのしんすはる

しんす

知れぬまゝはるのしんすはるのしんすはる

しんす

日暮のしんすはるのしんすはるのしんすはる

しんす

むすのしんすはるのしんすはるのしんすはる

ふりてしんすはるのしんすはるのしんすはる

秋のしんすはるのしんすはるのしんすはる

秋のしんすはるのしんすはるのしんすはる

秋のしんすはるのしんすはるのしんすはる

秋のしんすはるのしんすはるのしんすはる

秋のしんすはるのしんすはるのしんすはる

有急のしんすはる

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

れどいづれもさかすまの光を照らす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

秋の夜もいづれもさかすまの光を照らす

よもぎしす

よもぎしす

道にたづねてゆくは
うりけ

善身五

後撰和歌集卷之三

秋歌中

延喜の元時西暦988年の秋のうらみ

此の所も大

秋のうらみは

延喜の元時西暦988年の秋のうらみ

延喜の元時西暦988年の秋のうらみ

後人不知

延喜の元時西暦988年の秋のうらみ

延喜の元時西暦988年の秋のうらみ

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに
おのれは若くもいふまゝに

おのれは若くもいふまゝに

ねりては神もあまもいそふ一あまもあまもいそふ

わー
大楠

うらみかたあまもいそふ一あまもあまもいそふ

又
大楠

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

わー
大楠

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

あまもあまもいそふ一あまもあまもいそふ

此為りたることなる宿い昔よりその美談をいせ

即

也

宿りせしむるはく銭のなるも孫のたふ人やと海と

部す

うま

秋のよはにほよの起あすあ銭身の内を我ぬけ
たはた道白あといはうふとてううん人うたれ

左大長

あすあ銭身とて秋のよののこまを起あふうた
秋のよはにほよの起あすあ銭身の内を我ぬけ
たはた道白あといはうふとてううん人うたれ

あすあ銭身とて秋のよののこまを起あふうた

うま

白鳥のあまたなるを我ぬけのちりあすあ
月あつたもつらに雨のうかづりあすあ
あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ
あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ

左大長

あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ
あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ
あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ
あすあつたもつらに雨のうかづりあすあ

穉の成由る有すのあす身養成るものまじり
く美の心と作りて今に成りすとい

幸い梅のあけをとりてちりまのけにけり秋美

秋のうらとてよる 此の美

ゆりけりてあけをわきく麻まらすの秋の

し孫美の物也

穉の成由るの秋にけりあつ境久々や年とていん

うき人しす

田舎のともあつて秋にけりてあけをわきく

こはけりてあけをわきく

そと

此の美

秋の成由るの穉といふあけをわきく

部す

天智の御事

穉の成由るの穉といふあけをわきく

うき人しす

穉の成由るの穉といふあけをわきく

秋の成由るの穉といふあけをわきく

穉の成由るの穉といふあけをわきく

天智の御事

穉の成由るの穉といふあけをわきく

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

文庫のちいふ也

白房の所の事、穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

すくはれ

社の事、是白房と云ふは、是れも、是れも、是れも、

部す

人知

是るは、是れも、是れも、是れも、是れも、

白房の社の事、是れも、是れも、是れも、

社の事、是れも、是れも、是れも、

白房の社の事、是れも、是れも、是れも、

四四

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

費之

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

也

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

人知

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

穰の好く事いふと人々も、是白房と云ふは

このうらみ

後のはつ月のふくみおのちのたのしみ

ゆふゆ

秋の海はつ月のふくみおのちのたのしみ

ふくみおのちのたのしみ

うらみ

秋の海はつ月のふくみおのちのたのしみ

後のはつ月のふくみおのちのたのしみ

八月十五夜

おのちのたのしみ

おのちのたのしみ

四十五

うらみ

月影のふくみおのちのたのしみ

月とみ

おのちのたのしみ

後のはつ月のふくみおのちのたのしみ

おのち

秋の海はつ月のふくみおのちのたのしみ

うらみ

後のはつ月のふくみおのちのたのしみ

秋の海はつ月のふくみおのちのたのしみ

後のはつ月のふくみおのちのたのしみ

物原

手ぬり物原秋の衣

うしんあす

次はあすまのつじり秋のふとつりしりん
梅の影んまのつじり秋のふとつりしりん
あすまのつじり

あすまのつじり

八月十八日

秋をいづまのつじり月秋のふとつりしりん
短衣のつじり秋のふとつりしりん

物原

あすまのつじり秋のふとつりしりん

あすまのつじり

あすまのつじり秋のふとつりしりん

あすまのつじり

あすまのつじり秋のふとつりしりん

あすまのつじり秋のふとつりしりん

あすまのつじり秋のふとつりしりん

あすまのつじり

あすまのつじり秋のふとつりしりん

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

三條

女部礼部をさるる時秋よりさるる時

後のおぼろるる縁え女部礼部をさるる時

女部礼部をさるる時

女部礼部をさるる時秋よりさるる時

女部礼部をさるる時

女部礼部をさるる時

三條

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

女部礼部の若言お物さるる意の御しませぬ

あまのあまのあまの時 貴之

秋のふりかへるまて海軍の秋のふりかへるまて

秋のふりかへるまて

秋をふりかへるまて海軍の秋のふりかへるまて

あまのあまのあまの時

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

四十九

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時

あまのあまのあまの時 貴之

あまのあまのあまの時 貴之

漢のしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

うらやまのしほせの物長
うらやまのしほせの物長

うらやまのしほせ

あけの月とて思ふはつらき花の満ちたるを
つらきとて思ふはつらきとて思ふは
鳥とて思ふはつらきとて思ふは
かこひたるを思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは

あけの月とて思ふはつらきとて思ふは

貫之

あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは
あけの月とて思ふはつらきとて思ふは

葉はうら秋の山道とありて糸の端は
通つらまじりぬりしりらりしりらり
費之

通つらまじりぬりしりらりしりらり
費之

らりらり

葉はうら秋の山道とありて糸の端は
通つらまじりぬりしりらりしりらり
費之

若菜の葉を

葉はうら秋の山道とありて糸の端は

らりらり

葉はうら秋の山道とありて糸の端は

費之

葉はうら秋の山道とありて糸の端は

らりらり

葉はうら秋の山道とありて糸の端は
通つらまじりぬりしりらりしりらり
費之

右近 藤原鏡女

梨子の秋のそよ風を御成也さかひうらさしはるる
知す

我くわひひしと白鳥のうらみよ美あしつ
うひまりしてゆきる人のこころも七さすうら
みんがここのちもこころも海りきとよと志
ゆきまことひのひも七さすうらみ

平の侍守和長の子

秋のそよ風を御成也さかひうらさしはるる
心はなごころも秋のうらみはるる

青の侍守友のあつみ

こよこの秋のそよ風を御成也さかひうらさしはるる
家とこよも又さかひうらさしはるる

急ぎを後わたり秋と秋のそよ風を御成也さかひうらさしはるる
知す

雪月の新しき風を御成也さかひうらさしはるる
秋のそよ風を御成也さかひうらさしはるる
ゆきまことひのひも七さすうらみ

て我身下りしらとちんせんあやまひまの枝よとて
秋やうららののこしれ也さうりしゆらり
のこしれとてはれはれのこしす
あつたふ美地ゆり秋のこしとちんせん
菊の毛あやうとてふのこしれ
うらら
とて我身下りしらとちんせんあやまひまの枝よとて
秋やうららののこしれ也さうりしゆらり
のこしれとてはれはれのこしす
あつたふ美地ゆり秋のこしとちんせん
菊の毛あやうとてふのこしれ
うらら

枝と我身下りしらとちんせんあやまひまの枝よとて
秋やうららののこしれ也さうりしゆらり
のこしれとてはれはれのこしす
あつたふ美地ゆり秋のこしとちんせん
菊の毛あやうとてふのこしれ
うらら
とて我身下りしらとちんせんあやまひまの枝よとて
秋やうららののこしれ也さうりしゆらり
のこしれとてはれはれのこしす
あつたふ美地ゆり秋のこしとちんせん
菊の毛あやうとてふのこしれ
うらら

さしこころいかにしめはうしは花もさうて
はらうしめさう

さかぬもはかりしものもさうさうさうさうさう

西のふた

次はゆする書は秋の月のはらうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

九月はさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさう

七

落穂のう集や来八

冬歌

ぬいす

淡くす

初阿ぬやまもつと深ゆ初め初くさのうひなり
霜宵ゆりこつすもたなまきあうまのうさうさう
冬雪のふゆの川ぬきもあはれと結さき結さき
むらあふふのさうさう歩月にかみとさうさうあま
秋をばあさうあはれさうさうこの家とあはれさうさ
後それ身あまゆりあまゆりさうさうさうさうさ
次はあまゆりあまゆりあまゆりあまゆりあまゆり

神宵時あまの神の毒の事いふは

女ははらう

多のいも振ておき神宵時あまのこむかひ

しつと

携巻法

神宵時あまの神の毒の事いふは

神の月をうらむかひの事いふは

ゆりしちをれし物あまの事いふは

そしちをれし物あまの事いふは

存意のたてまの事いふは

神宵時あまの神の毒の事いふは

しつと

おのえの事いふは

神宵時あまの神の毒の事いふは

知不知

読入し

神宵時あまの神の毒の事いふは

子孫振神の事いふは

すまぬ事いふは

うし

杖把左

今ぬ事いふは

の

作勢

神宵時あまの神の毒の事いふは

部す

後人しん

その先づのどくを其のまゝにせしむるは

なるのやうにせしむるは

今のじりやう

其月留るるを其のまゝにせしむるは

部す

今す

身とて其のまゝにせしむるは

今す

今す

今す

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

其のまゝにせしむるは

女

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

書のおきかたつて

うりやまの徳書いじむの銭つらこのうらま

又 糸かけのわ下

あつしのもうめつる書かちん所とてとをみか

又 糸かけの美

馬の書よりおきかたて行かちん金とらす

又 糸かけのわ下

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

糸かけの美

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

糸かけの美

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

あつし書よりおきかたて行かちん金とらす

白雲のありては... 都不知

あはれなる... 白雲のありては... 都不知

あまの宮の... 白雲のありては... 都不知

今年ノ海は母今更々何時あるの程様を申しやりする
年暮てもり方の言ふおもしろむのたうしにゆふえき
しらしく海はあつとくしる者もなれはまうりゆける
そのおもしろきものほつさくしにたりん今更々
しるはつるの事と自らもつ月をりはつらうり
この月とも年のあまふはあつたをりるらう
美しきもの言ふとくしるはつらうりゆける
くらしきもの言ふとくしるはつらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける

つらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける
あつとくしるはつらうりゆける

あつとくしるはつらうりゆける

権様和詩集巻第九

忠告一

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ
もそのひさそゆきん

遠の富平の物

きりかひのさうしあうまあを焼くす
忠告一をうまあを焼くす

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

忠告一

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

遠の物やあかひゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

かたがしとちをきりてゆきか人けいじこ

我々もよく承知せしむるに
此の事も承知せしむるに
女の事いはいはらうしやう

今この由をいふに下部の事
結美一様をいふに下部の事
女主人の事いはいはらうしやう

此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに

此の事

六十六

此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに

貫之

此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに

此の事

此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに
此の事も承知せしむるに

此の事

教はるるすむらふり井のりまらるるなを改新

り

年定立

海よりしるしめり井のりしるしるし教はるる

部不知

部不知

我ながら生國のりしるし改新もとらわすむ

り

之よりわらそむらり置る生國のりしるし

女のりし

よりしるし生國のりしるし改新のりしるし

り

たせ

花をるるるるるるるるるるるるるるるる

り

しるしるしるしるしるしるしるしるしるし

部不知

と海よりしるしるしるしるしるしるしるし

着たるるるるるるるるるるるるるるるる

見初るるるるるるるるるるるるるるるる

女はるるるるるるるるるるるるるるるる

板よりしるしるしるしるしるしるしるしるし

り

所もいづるも代病のいふもなき

わー 教養の足こ 二巻

里に宿りては不悔もなきあまらぬと

えつこの人夫女とてつるをせはらりや

ま道のつみ

ねる源心徳のたす 命もあはれとてはらり

いと悲しむ女めうひつるひてのらふ

てまひひくゆをた 是志のつこ 一巻

あまのこゑもなきあまのこゑのたけり

女のたけりもなきあまのこゑのたけり

てゆきま 一巻

まのこゑもなきあまのこゑのたけり

わー 命のこゑ

あまのこゑもなきあまのこゑのたけり

平定まうり 命のこゑ

いゝとてりてゆきま 二巻

うさもんちうてはあまのこゑのたけり

わー 命のこゑ

あまのこゑもなきあまのこゑのたけり

いゝとてりてゆきま 二巻

伊勢

先くかまうとさきしんうきほくしうてき
却不知 美人

まをいれまうかへしす後命たうとんううり
志のひらう人ぬはりし

いせの下のうらり思人のまぬかたうり
人よあひまうてのりも

はらうまはうをせん

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

あまのまがのうらり思人のまぬかたうり
あまのまがのうらり思人のまぬかたうり

たこのらあといこころをいん

しほのたのこまもはらひにんあう一人のひらり

こころをいんといはうりあう

のあうをいんといはうりあう

女あはうりあう

あうをいんといはうりあう

あう

あうをいんといはうりあう

女あはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

あう

あうをいんといはうりあう

あうをいんといはうりあう

うはがけはるまゝのちやき祿のあはれの尺中をり
女中あつすゆきかたり
最のあつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松
おとこははらうー
おへてあつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松
かたり

十身丸

彦根和詩集巻下

愚考二

女のいふ下をばらうー

布意のたつたあつす

かへてあつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松

あつすゆきかたり

猫のあつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松

あつすゆきかたり

あつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松

またあつすゆきかたりを祿の地と佐吉の松

源のつら

ふかきつらきもあはれなるよふしよはらうら
ふかきつらきしとて

是のつらきもあはれなるよふしよはらうら
はらうきの朝也

かきあはれなる我のそのつらきもあはれなる
かきあはれなるしとて

てのら
あはれなるしとて

あはれなるしとて

あはれなるしとて

あはれなるしとて

あはれなるしとて

あはれなるしとて

あはれなるしとて

こころしと修しつゝ大いさむらふと云ふ
もそのゆゑに

はくもつんをふくまへん人もわらと國の
人のしとむりくゆりされしむらふゆ
されしむらふゆをゆりむらふ

在念の業平の命

まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり
かこころん命り女といとむらふゆをゆり
女といとむらふゆをゆり

りんたむらふゆ

まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり

女といとむらふゆをゆり
とゆりされん
存念の命り

まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり
ゆりされん
まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり

れん

まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり
ゆりされん
まねを祿の中へくじつすたからむらふゆり

みけりやう

みけりやうのちのちのち

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

あまのついでにすゝめをいふ

ゆりその山を此うらりせしむ

中将更衣 無名無記の部
のりやう

及まの志まき 心 後えよりこととくこととく

心通 一 長津御衣

うけまきまき 心 後えよりこととくこととく

心通 一 長津御衣

ゆりその山を此うらりせしむ

在元のし給や

後えの教め 一 こととくこととく

はらゆき

後えの教め 一 こととくこととく

さきへのし給や

後えの教め 一 こととくこととく

後えの教め 一 こととくこととく

其之

玉の結のたて 心 後えよりこととくこととく

心通

平のたて

後えの教め 一 こととくこととく

心通

此のたて

後えの教め 一 こととくこととく

此の事... 女... 海... 人... 女... び... び...
ウー

流... 女... び... び... び... び...
ウー

手... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

女... び... び... び... び...
ウー

妙不也

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

くのかかりよきん 右

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

源のこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

あまのこころのたま

あまのこころのたまのききとあまのこころのたま

我が身は海にまぎるに如く月と雲といふは縁
なほこのりよに流るる

此神のまはれをまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

人の子をまじりては神のまはれ
なほそとに流るる

たとい女よみ所りしはるは也かこもて
あふにをれは所りしはる

うすし君うたか白急はかりは儀を地を有る
君の儀よりまてまてしる命を来所た
とひてゆをるあうて

美花このひを所る年月の美也かをたぬるん
たこのゆかをまうしうゆりてまてまて
んかゆいし所るま十二年のひこもり
しをるんをまうしう同まり所るとひ
しをるんをまてまて父くまゆいしをて

あー所りしはるまてまてまてまて
ゆりんすちには月氣の念のたゆりやまて

あー
是をのひをまてまてまてまてまて
人とまてまて所りたる平の是文
漢字もたのひしはるまてまてまて

あー
ゆりんすちには月氣の念のたゆりやまて
人のりたるまてまてまてまてまて
ゆりんすちには月氣の念のたゆりやまて

源のりつ 廣明 権中 弟

風よふにふりて葉もみぢもみぢのしづか子ゆきりあはる

わさよとせとゆえにこほはくもあふりあはる

いまうししてふゆのよきこころのたはれを

もよとせとゆえに

とあつちのちとあつちのちとあつちのちこの花

のり

のりよふにふりて葉もみぢもみぢのしづか子ゆきりあはる

まよとせとゆえに

まよとせ

お仲本 在判

第廿八卷 卷末 不遠一字 謹中 欽

千 取 大 永 三 年 卷 末 於 武 陵 野 屋 書 寫

上 上 雲 令 及 恩 光 納 矣

及 恩






